

の人が知らない偉人を発掘してきた。これはいつでも大事な
ことなので、続けると良いと思う。

丸山睦男

① 「60〜70ふたたび市民としての抵抗」一九七〇年六月臨
時増刊号、「いま子どもはなにを」一九七三年四月号、「集団
の創造力」八八年六月別冊一九号

② 一九五七年（昭和三二年）、新しい結婚生活をはじめた
頃、浅草吉野町の靴製造の店に一年近く勤めた。吉野町に隣
接したところが、山谷であった。編集にかかわった時、「山
谷」を特集しうる準備も、力もなかった。残念だと思う。

③ 「現代中国の農村」あるいは「現代中国の農村の現在」
現地からの報告、訪問者（旅行者）の紀行文、あるいは定
点観測等により、できる限りの判断材料を得たいと思う。中
国農村の現況とその未来は、中国一国の国内問題にとどまら
ない。そのことは、広い共通認識であるが、予測は漠とした
もので、不確かでもあるからだ。

事実判断の一步手前でも、提出できれば、よいのだが。

山口文憲

① 記憶がはっきりしませんが、編集部に入りにしていたの
は、たぶん一九七二年から七三年にかけての二〜二年間だっ

たのではないでしょうか。どういいういきさつで編集委員になっ
たのかも、いまとなってはうまく思い出せません。私は思想
の科学研究会の会員ではありませんでしたから、ベ平連のつ
ながりだと思えます。たぶん室謙二か俊輔さんあるいは良行
さんあたりに引つ張りこまれたのでは……。

それともう一つ、私はその頃、すでにフリーライターのよ
うなことを始めていましたから、そちらからの接点というか
ルートもなかったとはいえませんが。編集委員になる前に、す
でに何度か『思想の科学』に書かせてもらったことがあった
んだと思います。

当時、飯田橋の雑居ビル最上階のオフィスにいたのは、社
長の森山さん、吉田さん、それから那須さん。いや、ちよっ
と待ってくださいよ。入れ違いに那須さんはもうお辞めになっ
ていたのかも……。そのあたりがもう一つはっきりしません。

若手では高崎さんがいました。のちに朝鮮問題研究者とし
て一家をなす高崎（宗司）さんはまだ学生然としていて、い
つも長袖のワイシャツに黒ズボンといういでたち。髪も油っ
気のない短髪でした。まあ、あちらのほうが年長ですが、世
代的には私ともそう違いはなかったんじゃないでしょうか。

その高崎さんの「異形」をみて、なるほどここはベ平連とは
カルチャーが違うんだという感じを持ったのをいまでもよ
く覚えています。

なにしろ、ベ平連のほうはジーンズ（当時はGパンといいました）にTシャツ、それに肩まである長髪というのが標準的なファッションで、吉岡忍なんか、底がやたらと厚い流行のロンドンブーツを履いていくくらいです。若者だけではありません。事務局長の吉川（勇一）さんなんかもいつのまにか影響されて、ジーンズをはきだしたりしました。ですから思想の科学は私にとっては一つの異世界、異文化空間でした。それを象徴するのが、一つは高崎さんのいささか「反時代的」ないでたち。そしてもう一つが、吉田さんのいつもかわらぬ丁寧で丁寧なものいい。聞いているこちらが思わず恐縮したくなるほどの折り目正しい挨拶だった、といったらいでしようか。

編集委員会を仕切っていたのは栗原彬さんだったと思います。研究会内の人間関係や学問の世界の人脈に疎い私は、誰に聞いたのか、栗原さんのことを、ただなんとなく立教の高畠通敏さんのお弟子さんという風に理解していました。高畠さんなら、それ以前から存じあげていて、米軍脱走兵援助運動のなかで脱走兵をご自宅に匿ってもらったりしたことがあったからです。そのお弟子さんだけあって、栗原さんみたいへんな人物だということが編集委員会に出席するうちに分かってきました。まだ若手の学者という感じでしたが、コミュニケーション能力抜群で、教えて頂いたことは数知れません。

② あれは編集委員として関わった特集なのか、それともそれ以前、あるいはそれ以後に執筆者として関係した企画なのか、そのあたりがかならずしも判然としないのですが……。室謙二と二人で野口体操の体験ルポをしたことがあります。どこかの体育館で行われていた講習会に何度も通って、野口「教祖」のお宅にまで押しかけました。室謙二が写真を撮り私がイラストをかく。文章は二人で相談しながら作るという楽しい作業でした。

野口体操のにわか信者になった私は、ベ平連に顔を出したときに、吉川さんをつかまえていました。「すごい体操があるんですよ。あれをやると思想も世界観も変わっちゃうんです。吉川さんも一度やってみませんか」。すると吉川さんは冗談とも本気ともつかない顔で答えました。「それだけごめんだね。私はこれでもマルクス主義者なんだよ。思想や世界観が変わっちゃうような体操をするわけにはいかない」……。皇居一周ランニングの体験記みたいなことを私が書いたのは、たぶん編集委員のときだったのではないでしょう。実際に私も走ってみるようになったのですが、あいにく私は靴を持っていません。すると社長の森山さんが、特別にランニングシューズを出してくださいました。そのときの赤に白のラインが入ったシューズは、その後一〇年くらい私の下駄箱にあったと思います。